

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

戦争を体験した世代がだんだんと少なくなつてゆくことから、平和への願いを子どもたちに語り伝えてゆくにはと考へていた矢先、第五福竜丸の元乗組員大石又七さんの著書『死の灰を背負って』私の人生を変えた第五福竜丸に出会いました。

## 大石又七著 『死の灰を背負って』を読んで

堀田 てる子

この本を読んでみて、「被爆者の立場に立って」と言葉では言えても、大石さんたちの苦悩は私の想像をはるかに超えるものでした。

命を育てるお母さん、次代を担う若者たち、そして中学生や高校生のみなさんに、一人の元漁師の話を通して、いま、忘れられようとしているこのビキニ事件を知ってほしい。この平和で豊かな国、日本、といわれる時代だからこそ伝えておきたい。と……。

## 船体の横で「英伸三写真展」開く

「原水爆のない未来へー船を見つめる子どもたち」

十一月二十六日から、展示館で「英伸三写真展」がはじまりました(十二月二十八日まで)。

「原水爆のない未来へー船を見つめる子どもたち」と題し、英さんの写真二十四点が、新たに完成した展示館のポスターとともに展示されました。

キリッと屹立する船首、無数の傷跡のつく甲板、はげ落ちそうなさらさらの甲板、流れるような曲線を見せる船尾……。見つめる子どもたち



写真展「船を見つめる子どもたち」

私たちの視線がそのひとつひとつの船の姿をしつかりとらえます。死の灰、ガイガー計数管、乗組員の被災写真、のぞき入るような小学生、船の周囲一列に並んだ高校生……。それぞれに、どのような思いがよぎっているのでしょうか。

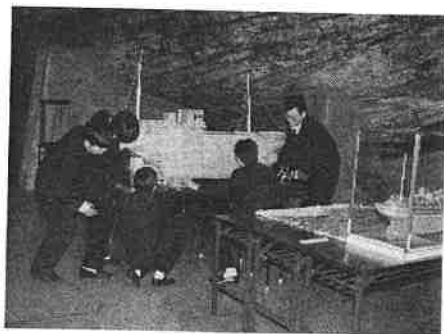
## 二百校をこえて小・中学校来館

「わりばしで作った第五福竜丸」贈呈

十月下旬から十一月末までに来館した小・中学校は二百校を超えました。折り鶴や作文を持参したり、合唱する学校もあり、説明に大忙しです。

トキワ松学園、東大付属中学校など毎年同時期に来館する学校も多く、東大付属中では、横田基地

うな、明るい笑顔で話すはだしの少女のすがたがひとときわ印象的です。どの写真も英さんの対象への厳しい目ともあるやさしさがにじんできて、小さいけれどすがすがしい写真展です。すぐ近くにまで迫った船腹の圧倒的な量感が、この写真展にびつたりです。



船を大事に運ぶ成城中学校の先生と生徒のみなさん

されてしまうほどでした。写真展に先きだつて、二十五日には、英さんとともに二人の写真家も協力して、パネル作成にあたった青年と一緒に丁寧に取り付けがおこなわれました。案内のほがきも、江東区役所、図書館はじめ区内の文化団体、労働組合、YMCA、NHKなどにポスターとともに届けられ、来館が訴えられました。

## 評議員会開く

十一月六日、学士会館で協会の九一年度第二回の評議員会が開かれ、「第五福竜丸平和協会の活動を発展させるために」を主議題に熱心に討議しました。十二月十一日には第百五回理事会が開かれます。

ビキニの海は忘れない②  
マグロ漁業基地  
室戸

山下正寿



第2幸成丸漁労長・嶋山秀雄さん

重被ばく者である藤井節弥さんの乗ったマグロ船の航跡を追いはじめた。節弥さんはマグロ漁業基地・室戸の船を中心に十隻程に乗り継いでいた。一九五六年、「王子丸」に乗船、ビキニ・エニウェトク環礁で一回の核実験中に、実

幡多ゼミは、長崎・ビキニの二重被ばく者である藤井節弥さんの乗ったマグロ船の航跡を追いはじめた。節弥さんはマグロ漁業基地・室戸の船を中心に十隻程に乗り継いでいた。一九五六年、「王子丸」に乗船、ビキニ・エニウェトク環礁で一回の核実験中に、実

母親の馬さんは日記の中で「原爆さえ受けなければ節弥だって死にはしなかっただろうし、一回受けてさえ神経をとがらせていたのにまぐる船でビキニの危険区域近くについて操業していた事を帰国した時話していたのに。何故入院した時気が付かなかったのか。いまだに不思議でならん。今でもそれが残念でならぬ」と書いています。

ビキニ事件を消し去ろうとした力が節弥さんたちを危険区域に行かせ、息子の死因が解らない母親の無念さをつくった。これは、一

万名前後のビキニ被災漁船船員とその家族に今も共通した問題として残っている。圧倒的多くの被災者が自らの被災の事実を自覚していないところに、広島・長崎と異なる深刻さがある。

「室戸岬水産高校生 白血球長期にわたって減少」という当時の新聞報道見出しを発見した私たちは、自分の教え子が被災したような衝撃を受け、はじかれたように室戸に向い、以後四年間におよぶ調査が続いた。

室戸はいつも強い潮風が吹き渡っていた。防波堤から海を眺めている老人のほとんどがマグロ漁業の経験者だった。岬にいたる旧道に室戸岬水産高校生の家があり、彼は久保山愛吉さんの後を追うように急性白血病で死亡していた。

そして、彼の家と十m程のところ節弥さんの下宿先があり、一軒おき程にビキニ被災関係者の家があるなど、室戸との深い関わりを実感した。

戦争と子ども

「せんそう」を編集して

大塚達男

地ごくの海

愛知県 近藤麻有美 (六年)

黒ずんだ海。  
どろどろの海。  
白い目をして  
海岸に横たわっているウ。  
ペルシャ湾が  
地ごくの海に変わった。  
「完全にもどるまでには  
二百年かかるでしょう」  
二百年、  
二百年、

戦争とは  
どれだけの物をうばえば  
気がすむのだろう。  
人の尊い命。  
美しい自然。  
人を苦しめへつき落とす。  
人を悲しみへつき落とす。  
にくい戦争。  
してはいけないことだったのに。  
黒ずんだ海。  
どろどろの海。  
白い目をして  
海岸に横たわっているウ。  
ペルシャ湾が  
地ごくの海に変わった  
一九九一年、一月。



せんそう―詩と作文

右の児童詩は、わたくしたちが七月に刊行した「せんそう」詩

と作文」という本のなかの一篇です。

この本には、戦争を題材とした子どもたちの作品八三点を収録しました。第一章を「ぼくは湾岸戦争をみた」として最近の作品を、第二章では「お父さんは還ってこない」と、日清戦争から十五年戦争までを、そして、第三章は敗戦から今日まで「平和への願いをこめて」としました。

どの作品も、子どもたちが、自分の生活のなかでとらえた「せんそう」を、ありのままに表現しています。そして、その時代時代の子どもたちの姿と心情があらわれています。

\* \* \*

わたくしたちがこの本をつくらうとしたきっかけは、一月十七日にはじまった湾岸戦争でした。戦争体験のない子どもたちが、この湾岸戦争をどう見、どう考えているのだからか、テレビゲームなどでシミュレーションの世界になれた子どもたちが、あのハイテク兵器をハイテク映像で見て、どんな心を働かせているのだろうかなどという問題意識でした。

わたくしたちの訴えにこたえて、

たくさん先生方が、クラスの子どもの作品を送ってくださいました。その数百点の作品を読みながら「子どもたちは健全だ」と確信したのです。どの子も、テレビゲームと湾岸戦争を完全に切りはなし、現実のものとして考えていました。そして、多くの子どもは、自分の生活をおして、湾岸戦争を直視して真剣に考えていたのです。

この事実にはげまされたわたくしたちは、日本作文の会(作文教育の専門研究団体の会員は教師)が蓄積している作品群をよりどころとして、第二章、第三章の作品発掘をいそいそとします。

そして、わたしは、完成したこの本にはほびりをしました。「せんそう」への子どもたちの証言、平和を願う子どもたちの魂が、この一冊に集約されているからでした。日本のおとなとしての自分の生きかたを、この本づくりで教えられたと考えたからです。

(日本作文の会編「せんそう」詩と作文) 岩崎書店、千三百円)  
△日本作文の会・常任委員▽